
イーヴルバランス

ブラックフィクション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーヴルバランス

【Nコード】

N8046J

【作者名】

ブラックフィクション

【あらすじ】

変わり映えない世界。その中で変わってしまった者たち、変わろうとしない者、変われない者、心が清い者、心が濁った者。

そんな奴らが集まって何が起きるのか？

人を助ける事を大切にするか？ 助けられる事を大切にするか？

主人公とは、何なのか？

脇役とは、何なのか？

誰が誰を救うのか、誰が誰に救われるのか？

そして物語はバランスが崩れる事によって始まった！

第1章 繋がる人たち。(前書き)

新しく書き始めましたよろしく願います！

第1章 繋がる人たち。

人間とは自分に害を加える者とは普通仲良くなどなりやしない。

だが、その人間が今を生きる上で必要不可欠ならば表面上だけでも付き合うこともあるだろう。

しかし、自分には全く意味の無い存在だったら？ 害を加えるだけ加えて徳を全く生み出さない人間だったら？

ほとんどの人間が仲良くなる事もないだろう、嫌……むしろ空気と扱うのかもしれない。

それが人間と言う生き物だ……。

だが——もし……もしの話だが、害を加え徳を生み出さない人間が、「助けて！」と言ってきたら？

心が清い者なら、その人間を何も言わずに助けるだろう、嫌そもそも、害を加えるだけ加えて徳を全く生み出さない人間何て思うことは無いだろう。

だが世界は広いと言っても、心が清い者なんてのは数が少なすぎる。

害を加えるだけ加えて徳を全く生み出さない人間が「助けて！」と言ったのが、心が清くないものならば？ もし普通の人間ならば？

たぶんその人間を助けるかどうかは、助けを求められた人間の心の善悪の多さで決まるのではないのだろうか？

人間はそんな生き物……と思わないかな？

周りを見渡しても何も無い場所……嫌———何かによって吹き飛んで何も無くなってしまっている場所、そうやって比喩したほうが

しっくりするかも知れない、そんな場所にあると言えば金属のゴミと一人の人間——少年と呼ぶべきだろう歳の男が仰向けで倒れている、その姿は荒れ果てたものであった。

一般用語で雨と呼ばれている物質が少年に降りかかってくる。

少年はビクつきながら右手を挙げていく、何かを求めるように。さらに左手も同じように挙げようとしたが、ピクピク動くだけで全く挙がらない。

少年は左手を見るためにゆっくり顔を動かす、少年が見たものは曲がらないはずの方向に向いている自分の腕だった。

少年はため息をついて右手に顔を向けなおすと下唇を噛む。

今の少年の体の中で動くのは右手だけのようだ。

足には金属のゴミが積み重なっている、この状態から立ち上がったるする事はできないだろう。

すると雨が段々強くなってくる、それに比例するように太陽の光が雲によってどんどん遮られている、その光景を見ている少年の気持ちに不安が募っていく、だが少年はその不安が悲しみだとすぐに気づいた。

何故気づいたかは、少年自身も分かっていないようだ。

少年は右手を太陽の光に重ねてみると、掴むように手を握りこむ。

しばらくそのまま動かないでいたが、太陽の光が雲に隠れると少年はゆっくり手を胸に下ろす。

そこで少年は自分の心に疑問を持つ、たった今悲しいと思っていたはずなのに何故か達成感と呼べるものが心の中でうずいていた。

何故だか嬉しかったそして悲しかった。

「恵美……」

少年は自分で言って首をかしげる。

「誰だっけ……恵美って？」

少年は強くなっている雨を受け入れているようだった。

その様子は少しだけ……ほんの少しだけ、神のように見えた。

「俺は誰なんだ？」

そう言ったと同時に少年の目に雨が入る、しかし少年は目を閉じる事も無く何かを見続ける。

目に入った雨が目からこぼれ落ちた、涙のようで涙ではなかった。少年はゆっくり目を閉じた……。

こうして一人の人間——心が清い者の人生は幕を閉じた。

もし、この少年が助けた人間が、この少年の今の顔を見たらどんな反応をするのだろうか？

それは今ではもう確かめようの無い事である。

だがこれだけは言える、この少年は自分の思った通りにやったのである。

少年の顔はすばらしく綺麗な笑みだった……。

少しだけ過去の話をしよう、彼……嫌、彼らが何故こうなったか？興味が出ないか？

俺は朝が駄目だ……眠いから、そして夜も駄目だ……眠いから。

こんな俺の意見に賛同してくれる奴はいないだろうか？

いたら今すぐ俺と一緒に新しい法律を作ろう、一日10時間は寝ることって法律をさあ……。

「起きろ~~~~~下原~~~~~」
かはら

「ごふう！」

俺の腹の上にかかとがあるだと！

「かかと落しで起こすなって何回言わせるんだよ、テメーは！」

「起きないお前が悪い！」

「理不尽だ！　そして今何時だ？」

「約9時30分だ」

何て事だ今日はまだ約9時間30分しか寝てないじゃないか、このままでは禁断症状が……。

「寝る、せめて後30分は寝る！」

「駄目だ！　デートが待っている！」

「デートじゃね〜って言ってるんだろうが」

いかん、自分でも分かる今俺は顔が火照ってる！

つか紹介しよう、この騒がしい野郎は俺と同じ寮、部屋住んでいるつまりルームメイトだ。

名前は野荒狼のこうろうじ似ゾクに言うイケメンだ、髪は黒で軽くロン毛で高二、こいつがまた腹が立つ事ばっかやりやがって、一個一個言っていくと3時間はかかる。

うんでもって、俺が下原拓矢かはらたくや髪は短く黒髪で常に寝癖MAXで常に制服、寝るときも制服、風呂以外は制服だ！　そして高二。

こんな俺たちなのに何故か気だけは会う、何故だかね？

実はこの寮から、5分ぐらいで実家に着くぐらいの近さなのだが、少しでも学校に近ければよいと思って寮に住むことになってこいつとあったのだが……まあ、いつか説明するでしょう。

今回は特別に狼似の腹が立つ事を一つ教えよう。

それは狼似が俺の妹こと下原恵美かはらめぐみの事が好きだ！　と言う事だ。

皆妹を持っている人なら分かってくれるだろう！　同級生のイケメンに可愛い妹が取られてしまった上にこんなイケメンにお兄様と呼ばれるのは勘弁願いたい、考えたら吐き気をもよおす。

「デート、デート！」

「えーい、抱きつくな」

「ふなや！」

俺が狼似の腹を思い切り蹴っ飛ばすと変な声が出た。

それと、こいつがさっきからデートデートうるさい理由は、今日妹と会うのだ、久しぶりにね！

妹は違う学校の寮なので会うことが少なかったのだ。

「今日どこ集合だった？」

「ちょっと待て、何故身だしなみを整える？」

「何を言っている、俺も行くからに決まっているからであろう！」

こいつ！　俺が久しぶりに妹と会うのについて来るつもりか！

待てよ？　だからさっきからこいつはデートデートうるさかったのか？

俺はてっきり冷やかしかと思っていたのに。

「恵美ちゃんと会うのは久しぶりだな」

「やめろ、何か気持ち悪い！」

一瞬だけ眉毛を動かしてこっちを向く。

「それより、集合時間は？」

「集合時間11時のはずだが？」

「集合場所は？」

おもてまち
「表町だってよ」

「なるほど、さあ行こう！」

「待て、何故そんなに準備するのが早いんだ？　そして集合時間にも早いぞ！」

「恋に時間は関係ない！」

「使い方まちがえてるし！」

「そして、愛はキスが必要だ！」

「お前人の妹に何をするつもりだ！」

「キスだ！」

「あいつには、まだ必要ない！」

「恋に時間は関係ない！」

「会話がループした！」

はあ……はあ……会話で疲れるのこいつの時ぐらいだ。

「相変わらず、電話帳いっぱいだな」

「何勝手に見てんだよ！　つか何時^{いつ}取った？」

勝手にケータイ奪ってやがった。

「ケータイ見るのは犯罪か？　そして5秒前に取った！」

「プライバシーを守ってくれよ！」

「嫌だ！」

「一言で却下かよ！」

いやそれより俺はお前に言わなきゃならない事あるんだ！

「プライバシーで思い出した、良く聞け狼似！ お前少し自重しろ
じちよう
！」

「何をだ？ ケータイか？ 安心しろ俺のケータイはロックが常日頃かかっている。」

「ケータイじゃない！ そしてロックがかかってるのは、ロックナンバー忘れたんだろ！」

「そんな馬鹿な！」

「どうした？」

「反論できない！」

「たりめゝだ！」

いかん話がこじれた。

「ちょっと黙って聞けゝ！」

「仕方ないな、話を聞こう！」

「よし、良く聞け！ お前これからは————」

第1章 繋がる人たち。 (後書き)

面白く、楽しく、怖く、悲しく、嬉しく、切なく。していきたいと思えます。

よろしくお願いします！

第2章 バカと変態の代名詞

「俺のパソコンでエロ画もしくはエロ動を取るな！」

「生命の象徴を無くせと言うのか！」

「そんな象徴いらなくね？　つか自分ので取れよ！」

「容量が少ないんだよ。」

ああ、仕方ないこれだけは妥協しよう。

「分かった、仕方ないパソコンで取っていいが……」

「いいが？」

「パソコンの壁紙をエロ画にする事だけはやめろ！」

狼似是、うう　と言ってちよつと退く。

「まてよ大体、下原だって壁紙怖いのはっかじゃないか！」

「俺のだからいいんだよ！」

「この前の壁紙だって、人間の両目から針が生えてるって何あれ？
見た夜寝れなかったよ！」

「子供だなおい！」

「あの画像が怖いからいけないんだよ」

「どんどん子供化してんぞ！」

「うううううう」

「泣くなよ、お前この年で泣くなよ！　真面目に泣くなよ！」

「うう、じゃああの壁紙やめてくれる？」

「分かった、その代わりおめもやめろよ！　な！」

「OK！　流石、これでこそウィンウィンだな！」

「豹変しすぎだ……」

とりあえずエロ画をやめさせる事ができた（自分の趣味を犠牲に）俺は布団を掴んで包まる。

後30分寝ないと精神的にきついしね、精神的にね！

「下原くガムテープどこ？」

「ガムテープなら机の下だけど、何に使うんだよ？」

「秘密」

あつそ　と言って俺は睡眠モードに入る。

あれ？　狼似またパソコンやりだしやがった、また変なの取ってんじゃねくだろうな？

……ちよつと、今ウイーンってコピー機？　何に使ってんだあいつは？　嫌な予感しかないんだが。

とりあえず30分寝るとしよう、何かやつとたら起きてからボコルか……。

「二度寝は体に悪いよ」

全く誰のせいだと思ってるのだから。

……………。

拓矢は驚愕した。

「何だこれは？」

俺の視野にポスターらしいものが見えるのだが、これたしか生徒会の○存の会長さんでは？

何故貼ってある？ 嫌一人しかいないか。

「狼似、何やってんのかな？」

「おお！ 起きた？」

「何か妙な起き方だな」

「……どうして？」

分かってらしゃらない！ いいぜ教えてやるとも。

「何だこのポスターは？」

「それは二次元萌えってのを確認しようかと」

何て簡単な理由なんだ、驚いたぜ。

どうやら俺は毎回詰めが甘いらしい、気づいたら床全体にラノベに出てきそうなヒロインのコピーが大量にあふれている。

「コピー機……止めようか」

「え、何でえ……、止めるからほうきを下ろそうよ！」

あれえいつの間にかほうきを持っていたらしい、おかしいな？

「一つ聞いていいか？」

「ホラー関係以外なら何でもOK！」

「お前の頭の中はピンク一色か？」

「ピンク9割、黒1割だ!」

「警察って未遂で捕まえられるっけ?」

あれ? またケータイないし、これじゃ110番できないじゃん。

「ケータイしばらくあずかりまっす! ほげはあ!」

また勝手に奪ってやがった、とりあえず正義の鉄拳。

「待ってくれ、警察に連絡する前に集合時間だ……」

鼻血出しながら告げるとは、なんと言う執念深さだ。

「マジか、もうそんな時間?」

「10…30です」

「やべ、電車出るじゃん、早く行かね〜と」

結構寝てたんだな俺。

「うへえへへえ! 待っている、恵美ちゃん」

うん、防犯ブザー買ってやるかな、恵美も喜ぶだろ。

「帰ってきたら片付けろよ!」

「わかってるって、ジュル」

「よだれ拭けよ……」

スタンガンの方がいいのかもしれない。

「なあ狼似」

「どうした、変態？」

「その言葉、お前に2. 3倍にして返す、ってかさっきから皆に見られてるような気がするのだが？」

気のせいだよと言って、自分の分だけ切符買う狼似、俺の分買っとけって言ったのに……。

「電車来たよ」

「何だと、まだ切符買って無いぞ！」

「急げ！」

「なあ！ 置いてくな、薄情者！」

後で、蹴り殺す。

「駆け込み乗車は危険ですのでおやめ下さい」

「すいませんでした、以降気をつけます」

「はひいはひゃひゃひゃ」

後ろで狼似が爆笑してる、誰のせいで駆け込む事になったか分かってないみたいだな……。

車掌が消えたの確認してから。

「キエロ！」

「ふにゃ！」

回し蹴りっす、ちょっと力入れました。

しかし、狼似がそのまま耐え切った。

「甘い、こんなんじや声もでねぜ！」

「今『ふにゃ！』とか言ってたよな？」

「何の事かな？ 君の蹴りは甘い甘過ぎる、まるで明治のように！」

「確かにミルクは甘いな、俺はノーマルが一番だと思う！」

「ああ！ 確かにノーマルはいいよ、だが夏にチョコはやめよう、店でチョコを売っているから危険なんだ、だからこれからは明治のはポッケに入れないようにしよう」

「何で？」

浅はかだったよ俺は、これに対して、『何で？』は無かったな、もっといい言い方があっただろうに。

でも普通夏に、チョコ持って外歩くなよ。

「ハンカチやろうか？」

「すまない……」

狼似はハンカチでポケットから溶けてあふれて来ているチョコをふき取っていく。

なんか虚しい。

「チョコと夏と言えば、恵美ちゃんに初めて会ったの約1年前じゃん」

「そうだったけ？」

「ああ、あの日は本当に暑かった、ポケットに突っ込んだチョコがドロドロに溶けるぐらい暑かった、町を歩いたびにプール用具を持った少年、少女等を見るほどの、そんな暑い日に会ったんだ、天使ちゃんと恵美ちゃんに始めてあったときに言われた言葉が『ごめんなさい』は強烈だった、今でも新鮮に思い出せる記憶だよ、むしろあの言葉で心に火がついたわけさ！ もちろん、一目惚れだからと言っても一言めに告白したのは間違いだったのかもしれない、だがそうしたくなるほどの可愛さなんだから仕方ないじゃないか、だってあの青い目にツインの茶髪髪、そしてロリっこ、完璧にドストライクゾーンじゃないか！ 今まで付き合ってきた人の中でも、あんなに完璧なのは見た事が無い、ここで告白しなきゃ駄目だろう、と思ったんだ仕方ない、あそこで我慢して後でゆっくり攻めるとゆう手はこの子には通じないと思ったからね！ やはりあの選択が最高の選択だと思う、やはりそうだ、何も間違っていないこれまでに失敗した事なんて無いじゃ無いか！ だが今まで散々色々な人を落としてきたが、このパターンの女子は初めてなんだ失敗を怖がって何が悪い、逆に恵美を攻略できる奴がいたら見てみたいね！ だってブラコン少女を攻略しろなんて、ギャルゲーでもないぜ、嫌分らないな、もしかしたら新しいパターンであるのかもしれないが、今はそんな事を言っているのでは無い、とりあえず今のところ助かっているの

は、下原がシスコンじゃないって事だけだ、これでもし、シスコンとブラコンの恋を止めて攻略しろなんて、今の実力じゃ無理だからねもっとレベルを上げていかないといけないじゃないか、たぶん今のレベルは98だと思うが、最後の1レベルを超える事ができないんだよ、超えた人間は落し神と比喻されるほどになるだろう！だから俺は神になるだ、恵美ちゃんをゲットするために、神にならないきゃならないんだ、これ以上今必要な事はあるか？　なあ！　下原！

「お前うるさい」

こいつ、恵美との思い出話になるとこうやって暴走するんだ困るぜ。

「疲れた寝る！」

「喋りすぎだ……だがまあもう着くんだが、表町……置いていい？」

「恵美ちゃんに会えなくなるのは死に等しい！」

「分かったって、降りるぞ」

俺が言うとうまい具合に電車が駅に到着して扉が開く。

『プシュー』

「プシュー」

「音を合わせようとするな、恥ずかしい」

「えへ！」

俺は狼似が持っているハンカチを奪い取ると、顔に塗るようにして顔に当てる。

「ぶひゃあ！」

チョコ顔ドロドロ人間の出来上がりだ。

第3章 不幸と幸福は紙一重

「うんで、うんで？ どこ集合？」

「だから表町おもてまちだって」

「表町のどこ？」

「ああ……表町ひょうちやうって店」

ケータイで確認、便利だよねケータイ！

「何か……色々駄目じゃない？ その店？」

「お前の顔よりは大丈夫だろう」

「なあ！ なんてことを！」

「こっち向いて喋るんじゃねーよ、チョコが飛ぶ」

「それ下原、ヒドイ」

そんな事は無い、俺は広ーい心を持っていますよ。

「つか、さっさと抜けろ、後ろ詰まってんぞ！」

「切符が無いんだよ、さっき買った奴が……」

「買って来い」

「金貸して」

「何で？」

「1万しかない……」

「崩して来い！」

「心狭い……」

「うるさい、さっさとどけ、そして俺の妹の前に二度と現れるな」

「やなこった！」

いきなり強気になりやがって、キャラ統一しやがれ。

「下原？ 迷っ」

「てない！ 決して迷子などではない、俺が駅から5分の場所が分からず迷う筈が無い！」

「さっきの場所右だったんじゃない」

「左で合ってる！」

「そうっすか……」

この地図によると今俺はもう店に着いている筈なのだが、目の前に広がるのは広大な畑である。

「下原……地図逆……」

「……………」

ハツツツツツツズイイイイ！

「待て、わざとだ……こっちだ！ 着いて来い！」

「無駄な時間だ……」

「何故こんな暗いところに出るんだ？ 裏路地じゃん完全に。」

「嫌そんなはずは……」

「おーい……」

「俺が道を間違えるなど……」

「聞こえてない……、下原ちよっと地図よこせ！」

「ああ！」

地図が俺の手から消えてしまう。

「……………すごいな下原」

「どうした？ まさかもうすぐ近くなのか！」

「そこ曲がってみろ——」

「おっし！」

俺はすばらしい柔軟性で障害物をよけながら曲がる。

そこには、

「——ラブホがあるはずだ！」

「ノーノー！ 何故騙した？ 今必要だった？ 出入り口ガラスだから、店員と目が合っちゃったよ！」

『ウィイイン』

「店員来たアアア！ 狼似逃げるぞ……って居ないしょー！」

「お疲れ、昼間っから入ろうとするとはお前もやるな！」
「何故……こんな……事を……したんだ……」
「チョコの分」
「なるほど……」

納得してしまう自分が居た。

「とりあえず、次は大丈夫だそこを左に曲がれ」
「次は大丈夫だろうな……」
「大丈夫——」
「おっし！」

俺はもはや障害物をけり飛ばしながら進んでいく。
そこには、

「——山口組が居るはずだ！」
「ヤークーザー！」
「ドンマイ」
「みげろ」
「逃げろだろ……」
「やばいって！　これはやばいって！」
『サク　サク　サク』

ナイフが、俺が走った後の後ろの壁に刺さってますが！
マジでやばいって！

「後は頼んだ、下原！」

「あがつ！」

顔が、顔が変形してまう……。

「殴られてなお走り続けるとは見直したぞ下原、だがこけてくれな
いと意味無いんだが……」

「褒められて初めて嬉しくなかった……」

「今褒めてる筈が無いだろう……」

「何か言った？」

「嫌、何でもない」

ヤクザから逃げ切ったようだ。

「次はどっちに行けばいいんだ？」

「下原その玄関を」

「引っかかるか！　もう騙されんぞ、今度は何だ？　人の家か？」

俺を不法侵入者にするつもりか？」

「嫌、闇医者の家だ」

「何故だ〜！　つかさっきから何だよ、何で地図にヤクザの場所とか闇医者のところが載ってんだよ」

「分からん、そうゆう地図何でしょ」

「警察が使ってそうなのがするんだが気のせいかな？」

「右端に警察特別真相マップで書いてある……」

「何だってー！」

「と、思ったら100円マップだった」

「……言わないで、金ないんだよ、今……」

今財布の中には野口さん一人と鳳凰堂が7個しかありません。

「とりあえず、そこ曲がってみ」

「またか！」

「いいから曲がってみ」

「大丈夫なんだな、本当に大丈夫なんだな？」

「ああ、男なら行かなきゃ駄目なときがある！」

「……よし、もう一度だけ信じてみよう！」

「流石だな——」

俺はダイブするがごとく角を曲がる。

そこには、

「——エロ本捨て場になっている場所に突っ込むとは！」

「……………」

「……………」

「……………」

「無反応？　ちょっと反応してくれよ！　……………つてええ？」

狼似が俺が入った場所を覗き込むと硬直する。

嫌、誰でもそうなるんじゃないかな？

だってよく、ね。

普通エロ本の上に寝ている少女を見たらさそうなるよね！ うん！
年は大体14から17ぐらいってところかな？ しかし……真っ
青のワンピースって何か狙ってんのこの少女？ 俺のドストライク
だよ、髪の色、紫、そしてサイドテール、胸は……目をつぶるとし
て、このプロポ肌……。

最高だ！

「駄目だ守備範囲じゃねえ！」

「何を言っている、狼似パーフェクトじゃないか……」

「ええ……、下原ってペッタン好きだったの？」

「何故そうなる！」

即答してやった、ペッタン言うな、発育が悪いだけだ！ 発育が！

「……………誰？」

「起きちゃったー！」

起きちゃったよ、狼似のせいだからな、もっと寝顔見ていたかった
というのに。

「……………もしかして……………清い人？ そうなの？」

「はい？」

「そうなの どうなの？」

泣きそうだよ、ちょっと大丈夫かよ……………。

ここは何て答えるべきか……。

「そうだよ！ この兄ちゃんがそうだよ！」

狼似何で俺なんだ？ 良いのかそんな適当に返事して！

「やっぱり！ 助けて！ 皆を助けて！」

「はいい？ ちょっとええ？ 離れて離れて、嫌、離れないで」

「下原、本音、本音！」

だっていきなり抱きつかれても困るというかなんとゆうか？
本音も出てまうとゆうか、テンパってしまうとゆうか？

「とりあえず、話を聞こうか……、君名前は？」

「恵美、恵美夢乃」
めぐみゆめの

「恵……恵美かぶりだと……しかも名前と苗字……」

「狼似ちよっと黙ろう」

「へい！」

「恵美さん？ えっと、とりあえず妹を待たせてるからそっちで話し聞いていい？」

「大丈夫だよ！」

よし、とりあえず店行こう！ もうすぐ11時過ぎるし……

『ポンポン』

「うん？ どうしたの狼似？ ちょっと首ひっぱんな！」

「恵美ちゃん……じゃ無かった、恵美さんちよっとまってね！」

「うん！」

笑顔可愛ええ！ ほれてまう。

「恵美さんと俺を離してどうしたの？ 狼似」

「……やるな下原……お持ち帰りじゃねーの？ てか、普通これって警察沙汰じゃねーの？」

「は！ そうゆう事になってしまふのか……」

気づいたら、顔が真っ赤だよ火照ってるよトマトだよ。

『ピロピロリン』

「俺だ……」

ケータイを確認する俺、差出人は恵美……妹からだ。

『メール57件』

『着信23件』

「マジか……！ まだ、11時1分だぜ、1分だけでこれだけ来るとてどうゆう事？」

「返事しとけ、恵美ちゃんのメールと着信の量は時間に比例するぜ！」

「知っとる！」

知っている人は知っている、妹はヤンデレなのだ。

『今から行くから安心しやがれ！』

「送信！ ……じゃあ行こうか狼似」

「ああ！ 恵美ちゃんの下に！」

俺は顔を恵美さんの方に向けると手で呼ぶ。

「さっさと行こう、これ以上遅れたら大変な事になる」

.....。

「つか大丈夫かな？ 警察に連絡しないで.....」

狼似が何か言っていたがよく聞き取れなかった。

『ガタンガタン、ガタンガタン』

電車に乗るのは何年ぶりだろうか？ この風景を見るのも久しぶりだ。

確か以前乗ったのは、3年前だろうか？ あの時確か優香と一緒にだったけな？

もう学校に僕の場所は無い、皆を大切にしたらから、誰か一人ではなく、皆を大切にしてしまったから僕は居場所が無くなった。

何が悪いのだろうか、皆を大切にする事の何が悪いのだろうか？他に何か方法があるのだろうか？

すべての答えを求めるために僕は電車に乗る、行く場所も分からぬまま。

僕は大荷物を足元に置く、手に持っているのが疲れたためだ。

『出雲いずもく出雲いずもに到着しまゝす』

結構乗ったんだな、いつの間にかもうすぐ裏町うらまち（終点）だ。

「セーフ！」

『ガタガラ』

髪は黒で軽くロン毛の少年が（と言っても同い年ぐらいだが）飛び乗ってくると同時に前の扉が開き、車掌が歩いてくる。前後ろの交代かな？

『扉が閉まりまゝす、ご注意ください』

『プシュー』

「トリヤアアアアアア！」

何か飛び込んできた！

「あつぶねー！ セーフ！」

ああ、車掌の目の前で……。

「お客様！」

「はい……」

「駆け込み乗車は危険ですでおやめ下さい」

「すいませんでした、以降気をつけます」

「はひいはひゃひゃひゃ」

やっぱりな……、少年二人組は何か片方が騒いでいたが、表町に着

くと出て行ってしまった。

面白い人たちだったな、また合えるような気がする、何でだろうか？

てゆうか、一人何か背中に張ってたけど何の画像あれ？ しかも
ガムテープで張ってあるし……

『裏町へ裏町に到着しまゝす』

さて、降りないと。

探さないと自分の答えを……皆の幸せを……。

『プシュー』

僕は一步電車から降りて、深く息を吸う……。

やっぱり外の空気はいいね。

「ああ、チョコ臭かった！」

第4章 不思議っ子とブチギレっ子

「お兄ちゃん……」

背筋に冷たいものが走ったのだが……。

目の前に座る妹から睨み付けられてます、怖いです、マジで怖い
です。

「誰なの？ その子？」

その子呼ばわりだよ、完全に切れてるんじゃないかな……。

「恵美さん……です……」

「はぁ？」

「嫌、この子が苗字が恵美であって、決して恵美を呼んだわけでは
ないのですが……」

帰ってこーい狼似ー、チョコなんか洗い落とす前に助けてくれー！
うん？ 恵美さんが手を挙げてこっちを見てらしゃる！

「……夢乃って呼んでください」

「えっ！ あ！ はい！」

「お兄ちゃんー！」

「アウチュ！ タイ！ イタイ！」

机の下で足を踏まないでいただきたい、そしてそんな目で睨まない
でいただきたい。

話をそらそう、じゃないと足の指が折れてしまう。

「……何か頼もうか……メニューを取ってくれ、ええと……」
……夢乃さん……」

『バキッ』

何かいやな音がしたが、気にしてはいけない。

「はい、どうぞ！」

「あ……ありがとうございます」

何故か手が震えているのだが……、たぶん前の鬼からの睨みつける
攻撃だろう。

「さて何か頼むか……恵美、奢おごってやるからその目をやめてくれ……」
……」

「……金無いくせに」

はう！ ……核心を突かれたぜ！

「夢乃奢りましょうか？」

「滅相も無いっ！ こんな可愛い子にそんな事させれません！」

「ええ！ あ……ありがとうございます……」

『ボキッ』

何かいやな音がしたが、気にしてはいけない、さっきより数倍の痛みをともなっているが、気にしない。

とっととメニューを開いて食うものを確認する、これ以上会話したら俺の足が持たない。

『表町おすすめ、表町カレーライス』

『表町グレープフルーツ』

『表町おすすめ、表町不人気、表町ハンバーグ』

「店員っ！ 振り仮名ふってくれっ〜！」

分からない、何がなんだか分からない、こんなメニューで大丈夫なのか？

おっ！ 来たな店員。

「どうなさいました、お客様？」

「メニューに送り仮名振って欲しいんですけど」

「こんな漢字も読めないのかよ……失礼、こちらのメニューをご覧ください」

『キッズメニュー』

「なめとんかっ〜〜〜！」

「ごゆっくり」

「逃げるな〜〜！ せめて背骨だけ折らせやがれっ！」

「お兄ちゃん、落ち着いて背骨折ったらこの人反対側にお辞儀できるようになっちゃうよ！」

「夢乃まず、お辞儀ができるような状態じゃないと思います！」

「……………」

思わず夢乃さんの顔を凝視してしまった、まさか普通につっこんでくるとは……。

「まあいいや、とりあえず振り仮名が振ってあるなら良いとしよう」

『表町おすすめ、表町カレーライス』

『表町グレープフルーツ』

『表町おすすめ、表町不人気、表町ハンバーグ』

予想以上だった。

「表町グレープフルーツしかまともなのが無いのか？」

てかまず、メニューが3個って駄目だろ。

「お兄ちゃん、そういえばどこでこの子と合ったの？」

「ああー！ そうだ夢乃さん、話を聞くはずだったよね！ 狼似がトイレに行ってるけど俺だけで大丈夫かな？」

「……………」

あれ駄目だったかな？ もっと慎重に聞くべきだったか？

「駄目だったら、後で聞くけど……」

「いいえ、夢乃言います、ここで言わないと皆が危険になっちゃうから」

夢乃さんは、顔をあげて俺に目線を合わせる。

「アタックキャッスルを壊してくださいっ！」

「……………」

本日二度目の凝視、恵美に関しては首を30度曲げてらっしゃる。

「あのー、めつつつつつつつつつちや詳しく説明してください」

「ああ！ すいません、どこから説明した方がよろしいでしょうか？」

「とりあえず、年と年齢と生まれた日を教えてくれない？」

「お兄ちゃん、それ全部同じ意味！」

「年は16歳で誕生日は11月29日です！」

「私と同じ年！　そしてお兄ちゃんなんでメモ取ってんの！」

後四カ月後じゃないか……、は！　また話がずれてしまう……。

「出身は？」

「あっ………」

あれ？　またやらかしちゃったか俺？

「大丈夫？　無理しなくて良いからね」

「大丈夫です、夢乃の出身は………三好^{みよし}です」

三好？　どこだっけ？　地図とかあまり見ないからどこに何があるのか分かんないんだよね。

「三好だと！」

おお！　びっくりしたく狼似か、やっと帰ってきたのか？

「狼似知ってるのか？」

「ああ！………2年前にニュースでな！　え〜と何て呼べばいい？」

「夢乃でいいです！」

「じゃあゆめっぴ、ゆめっぴが言う、三好は裏町^{うらまち}からしか行けない町だよな」

「はい………」

「ゆめっぴって馴れ馴れしいぞ狼似！」

「嫉妬すんな」

そんな、俺が嫉妬なんかする分けないに決まってるだろう。

「だが、三好は2年前に跡形もなく、消え去ったと聞いたが？」

「はい、この時代にはもう三好はありません……」

う！ 何かトゲのある言い方だな。

「皆さんに2年前の三好を救って未来の三好救って欲しいんです！」
「やっぱりな、そんな事だろうと思ってたんだよ……」

『ガタ』

狼似が椅子に座る、だけど何でそんな事だろうと思ってたのだろうか、俺はもうすでに意味が分からないんだけど。

「どうやって過去に行くんだ？」

「はい、それはイーブルスを使います！」

「ふん……」

なに喋ってるのこの人たち！ 悲しいよ俺、全くわかんない俺邪魔者か？

「1日くれ、話し合う」

俺に指を向けてくる狼似。 まず俺に説明してくれ！

「……………分かりました、また明日の昼、表町駅で会いましょう、失礼します！」

律儀にもちゃんと頭を下げて店を出て行く夢乃さん、可愛いな。

「さて、狼似どうゆうことかな？」

「そのまんまだろ、「助けて！」　って言われたんだ助けるよな下原」

「余計な詮索は無駄ってか、分かったよ狼似……………助けなきゃね」

「でも、何でか分からないが前にもこんな事があったような気がするんだよ」

「ふうん、変なの」

「だな」

さて、そろそろ帰るとするかな、明日の準備が必要だし…………。

『ガタ』

俺と狼似が席を立ち出口に向かおうとしたら、後ろから声が。

「お兄ちゃん、狼似先輩、私のこと忘れてるよねっ！」

あ！　そういえばいたな…………。

それより、狼似に誤らなきゃいかんことが。

「狼似！」

「どうした？」

「訂正、この店より狼似のチョコ顔のほうがましだった！」

「……………そうか」

「今は無き町、三好か」

何故こんなとこにたどり着いたのか分からないが、ここに呼ばれていたような気がする。

「殺風景だな」

何もない本当に何も無い、町の中心から外に向かって逃げるように雑草が生えてるぐらいだ。

僕はその中心に立つと思った。

似ていると。

この場所と、自分の今の心はとっても似ている。

「？ 何だこれ？」

僕は目に映った小さな錆びた鉄の破片を手取る、それをしばらく眺めるとポケットに収める。

「ここ、いい場所だな」

それだけ、言うとは僕は地面に寝転がり眠りに着いた。

この時だけ、僕は自分のことだけを大切にしていた。

第5章 良い人ではなくお節介

「狼似聞きたい事は沢山あるんだけど、わざわざ一個ずつ聞いていくな」

「答えられる範囲なら大丈夫だぜ！」

「よし、まず一つ！いきなりあんなこと言われて何で驚かなかったんだ？」

「言っただろう、前にもあったような気がするだけだっ！」

「…………じゃあ次だ、何でわざわざ帰る必要がある？」

「どれだけの日数かかるから分かんから荷作りだ！」

「なるほど、……次アタックキャッスルって奴どんなんだと思う？」

「普通に考えると、動く城って所でしょ！」

「妥当だな……じゃあイーブルスとは何だと思う？」

「まだ分からないけど、転送機械って奴かな？」

「そんな感じかな？……後二つ珍しく恵美にくつつかなよな？」

「うーん、ゆめっぴと合ったらそんな気分じゃ無くなった……………」

何でそんな意外そうな顔するんだ？」

「気にするな、そして最後の質問は……………」

…………俺の背中になに張ってくれとんじゃああああ

あああっ」

「おふあ」

俺は背中に張ってあった（二次元ヒロイン印刷つき）紙とともに狼似の腹を思いっきり殴る。

今は店を出てから、表町で静かな道の方を歩いているため今のやり取りも何の問題も無い。

注、駅までの道案内は恵美に任せてあります。

「年下より年上だったか…………あがあ」

目の前のものはただのゴミになってしまったようだ。

「お兄ちゃん！ 狼似先輩をいじめちゃ駄目だよ！」

「おおゝ天使がついに微笑んだのだゝ！」

確かにこれは珍しい、恵美が狼似の心配なんかするなんて。

こんな事今までに何回あったか……2回だけか。

一回目は全テストで赤点取ったときで。

二回目は遊園地で事故を起こしたジェットコースターに当たりそうになった事か、ああ客は誰も乗ってなかったぞ。

「いじめるなら……私を……いじめなさい………」

「年上ぶつてもしねゝからな、狼似うちの妹が考える俺のイメージが年上好きになっちまったぞ」

すべて勘違いだった。

「……………」

返事をしない（電車乗る前に買った）スタンガンの刑だ。

「……うべ……うべ……うべ……うべ」

「規則正しいな」

「私もやるっ！ やりたゝい！」

俺は何も言わず渡す、元々あげるつもりだったもんね。

「うへへへへへっ！ うへへへへへへっ！ うへへへへへへっ！」

「……………」

俺は狼似なめていたようだ……このままだと恵美がいざって時に余計に狼似の興奮をあげてしまうかもしれない。

もつとすごいものを探さなくては！

しかし……あれだな、何か変な絵見てる感じだな恵美が笑いながら電気流して、嬉しそうに悶える狼似……。

世界珍大賞取れるかもしれない。

「満足したなら駅に行きたいんだが？」

「「大満足です！」」

「おお……そうかじゃあ行こう」

びっくりした、まさかハモって来るなんて予想外だったよ。

案外この二人意見が合うのかもしれない、そんな事無いか。

疲れたと大声で叫んでやりたい、だがあいにくここは寮だ、そんな事ができるはずが無い。

何故こんなにも部屋は広いのに壁は薄いんだよ！

この前、誰かが寮の中でドッチボールなんてやるからしばらくの間、2人部屋が18人部屋になってしまった。

つまりボールが当たるとまさに崩れ落ちるぐらい壁は薄い。

「毎回思うんだが……何で恵美は寮に入り込めるんだ？」

「お兄ちゃんの制服着てたら普通に入れるよ！」

「……………何でお前が俺の制服持ってたんだよ」

嫌、聞く意味も無かったな。

「狼似先輩にもらったの！」

『スコッ』

「下原？ 顔にダーツのようなものがかすってたんだが……」

「安心しろ、次はちゃんと股間狙ってやる」

「せめても腹でっ！」

「腹よりすねなんかどうだ？」

「何でそんな微妙に痛いところばっかっ？ 許してくれ悪気は無かったんだ！」

「仕方が無い、今回はこれぐらいで許してやろう」

「めっちゃ安心した！」

「さっきのダーツには少量の毒が持っており」

「大量でない事に……安堵した」

とりあえず荷作りでもするかな、たとえどんな事が合っても助けなきゃならないんだろうし。

俺は軽く痙攣を起こしている狼似を部屋の端に転がすとダンスやなんやらからどんどん要りそうな物は自分のベットに置いていく。

そこで俺は考えた、俺と狼似は二年前に崩壊した三好に行くとしても恵美はどうするのだろうか？

はつきり言って兄貴的には着いてきて欲しくない、これは本心だジャマとかではなくただ単に心配なんだ。

「……………恵美」

「どうしたの？」

俺からの空気を受け取ってくれたのか、ちょっと真面目に受け答えしてくれる。

「話的に分かってくれていると思うが、明日からどうやら未来げんだいを変えにいく事になってしまったんだ、そこは分かってる？」

わずかにだけ恵美の顔が上下する。

「俺的には、俺と狼似だけで行きたいんだけど、どうするの？」

「もちろん着いていくよ！」

「……………やっぱりか」

困ったな、俺が行くと言った場所に着いて来て（本当にどこでも）、集合時間に1秒でも遅れたらすごいほどにメール・電話が来るし、好きな奴ができたなんて言った日には。

『私は妹こと下原恵美の事が大好きです、私は下原恵美以外の人には愛せません、私は下原恵美と付き合えるのなら何でもします、法律なんて破って無理やりにも結婚します、私は下原恵美が居ればご飯なんていりません』

これを朝から夜まで（0時から24時まで）ずっと読まされた。

そんな妹こと恵美をどうやって止めようか？

嫌、パターンのに何個かはあるのだが俺の皮膚が着いてる内はそれを使う事も無いだろう。

仕方が無い、ここは俺が折れておいたほうがいいみたいだな…………。

「じゃあ約束してくれ、絶対に無理をしない事、命大事に！　だ」
「わかったっ！」

「ただでさえお前は危ないのに、怪しいようなところに行くんだから本当に気つけなきゃ駄目だぜ！」

「うん！　……………でも何でお兄ちゃんと狼似先輩はそんなあからさまに嘘っぽい事なのに行こうとするの？　優しすぎない？」

思わず俺と狼似は目を合わす。

狼似は軽く笑うと、そっぽを向くとちよつと何かを考えるような顔になる、たぶん思い出してるのだろう俺と狼似が出会った日の事を。

「文脈がどんなのだろうが……………助けてとゆう単語に嘘は無い。」
「え？」

どんな奴だろうが助けてと言われたら助けるべきなんだ。

たとえ文脈に嘘があっても助けようと行動する事によって誰かは助かる、もしかしたらそれが俺かもしれないし、助けを求めた人かもしれないし、完全な第三者かもしれない、それでも助けようとする誰かが助かる。

だが誰かが助かるとゆう事はどこかで誰かが悲しんでいる状態を作る事になってしまう。

だから俺は助けを求められたら助ける、悲しんでいる奴に助けを求められたら助ける、これだと無限ループなような気もするが、俺は悲しさと嬉しさが平等にやってくればいいと思ってる、まあつまりバランスが釣り合えばいいそう思ってる。

そんな事を思わせるようになった痺れてるバカに言われた言葉を俺から恵美にそのまんま言っちゃった。

残ってるもんなんだな、心に響いた言葉ってのは…………。

「いつか分かる日がくるんじゃないか？ たぶんな」

「うーん？ とりあえず覚えとく」

いい子だ、本当にいつか俺の思ってる事を悟ったうえにもっと上に行ってしまうのかもしれない、それはそれで寂しいもんだな。

俺は朝が駄目だ、夜も駄目だ、眠いから。

とかほざいてる俺が珍しく夜中に起きた、窓から月からの日光が降り注いでいる。

何で起きたかというのとただ単に何かいつもと違う感じがしたからであるそれだけである。

「うーん？」

俺は左手で目を擦りながら、右手で左側の枕元に置いてあるはずのケータイを手探りで探す。

しかしいつも置いてある場所にケータイが無くもっと遠くを探す。

『チャプ』

何かに吸われるような感覚が指全体を包み込む。

俺が抜け出そうと指を思いっきり暴れさせると舌のようなものに当たる、嫌、舌だった……。

「うんっ！ 何？」

俺は勢いよく飛び上がろうとするが、妹こと恵美に指をしゃぶられているため足をつくようにゆっくり体を起こす。

「嫌、何か変な感じだな、おい」

てか、せっかく布団用意してやったのに、結局俺の布団の中潜り込んでんじゃねーかよ。

全く隙を見せればくっついてくるもんなこいつ、もっと大人しくできないのだろうか？

「はあ」

俺がため息をしてから、ちよつとの間だけ恵美に顔を見ていると、顔に変化が出る。

「ほにいちゃん、ふあすけてよ」

指をしゃぶっているためによく聞き取れないが何故か悲しくなってくるような事を言ってるような気がする。

「うええんっ……うええん」

「おいおい、大丈夫かよ」

何故か泣き出してしまった恵美の涙を手で拭いてから、軽く頭を撫でてやる。

しばらくやっているとなんか静かになっていく。

「すーうう、お兄ちゃん……ありがとう」

俺は苦笑してから、優しく抱いてやった。

俺も恵美も幸せそうな顔だったかも知れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8046j/>

イーヴルバランス

2010年10月10日02時45分発行